

第3回 泉佐野丘陵緑地 運営審議会 概要版

日時：平成28年10月18日（火）14:00～17:00

場所：泉佐野丘陵緑地 パークセンターほか

◆出席委員（敬称略）

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 増田昇（会長）

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 下村泰彦

元大阪府立大学大学院 教授 前中久行

うみべの森を育てる会 代表 西台幸子

大阪ガス株式会社 特任研究員 弘本由香里

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 代表 那須利之

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副代表 中川有司

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 事務局長 永井利治

泉佐野市都市整備部 部長 真瀬三智広

◆欠席委員（敬称略）

大阪市立大学大学院環境都市工学科准教授 嘉名光市

大輪会事務局 大西 弘薫

◆傍聴者 5名

◆概要

1. 現地確認 13:00～
2. 運営審議会開催計画と前回のふりかえり 14:00～
3. 協議案件 3件
 - ①天神川エリアでのホタル調査活動について
 - ②半島エリア（棚田跡地）の方向性検討
 - ③東地区の基本計画について
4. 報告案件 6件
 - ①プログラム報告（8～9月）
 - ②パークレンジャー養成講座について
 - ③第5回企業の森活動現地体験会の実施について
 - ④えんづくりプログラムの募集について
 - ⑤秋の郷あそびイベントについて
 - ⑥その他

＜運営審議会開催計画と前回のふりかえり＞

運営審議会開催計画と前回のふりかえりについて、事務局より説明。

＜協議案件1：天神川エリアでのホタル調査活動について＞

天神川エリアでのホタル調査活動について、事務局より説明。

- ・パーククラブとしては、このエリアはホタルの種類を数えるような調査ではなく、ホタルが卵から出てきてどのような成長をしていくのかを観察したい。卵から発生するケースをこのエリアで再現し、自分たちなりに勉強してみたい。
- ・そのようなことを学ぶためには、土地をどのような構造にしておくべきかを具体的に検討しておく必要がある。
- ・資料中①③は、本当に水を入れることができるかどうかという点で、課題である。竹をすべて抜根して土を入れ替えるということは考えられない。竹が生えている状態でもいいので水を入れ、本当に水がたまるかどうかを試すとよい。
- ・計画と、それに基づく記録をとってほしい。どうすればホタルの生育環境を担保できるのか、観察記録を残してほしい。
- ・子どもたちの勉強のためなのか、あるいはホタルの生育環境を整えていくことが最終目標なのか、目標によって方法が変わる。現状では、ホタルについて勉強したいということが第一義になっていると思われる。それに基づきながらも、その先の目標を設定しておく必要がある。
- ・ホタルやカワニナが増えると、近所の人が持って帰ってしまう可能性もある。そのようなことが発生しないような生育環境を整える必要がある。

＜協議案件2：半島エリア（棚田跡地）の方向性検討＞

半島エリア（棚田跡地）の方向性検討について、事務局より説明。

- ・転落防止柵などを考えると、池の周りに全て転落防止柵を設置しなければならない。そのような必要性はない。またかなりの量の竹の伐採が必要になるが、今の体力で本当に可能なのか。
- ・管理道路について、そもそも、チップーを通す必要があるのか。竹の処理は上の面だけで充分ではないか。下の面まで伐採すると、対岸から見た時の景観が悪くなる。さらに、転落防止柵も設置しなければならなくなる。工事量が増え、風景は壊れてしまい、管理もできなくなる。
- ・もう一度、どこが自由通路と自由広場なのかを考える必要がある。都市公園法で管理しているが、実際は自然公園のような場所なので、自由通路と自由広場以外は基本的に立ち入り禁止である。立ち入る場合は、全てプログラムつきである。
- ・最初の数年間は、プレリーダーのプログラム付き広場を作る、というプログラムを立案するのもおもしろい。そのためには、最低限の初期整備として何をすべきかだけを考えればよい。

・大泉緑地や服部緑地などと根本的に違うのは、これらの公園は林内に自由に入ることができることである。しかしこの公園は、自由通路と自由広場以外は許可がないと入ることができない。これは自然公園の考え方である。ただし全面禁止ではなく、観察会や、自然調査会など、プログラムの時には入ることができるということである。

・「つくり続ける」というキーワードを大切にしてきたが、完成形を求めすぎているのではないか、という危惧がある。他公園のような来園者数などの数字を目指すのであれば、そのための施策は必要である。しかし、そうではないスタイルが評価されてきた公園である。

・子供と接すること自体が楽しいということはもちろんだが、何でもかんでもお膳立てをして子供たちに楽しんでもらうのは望ましいことではない。むしろ、もっと本格的に自然の循環や風土と一緒に活動しながら学んでもらうということが基本としてあって、その中で遊びも覚えていくというストーリーが大切である。

・圃場について。パーククラブとしてはドンダリの森と、望みの丘東および南側斜面については、植樹を進めたい。ただ樹種については熟慮したい。

・これまでどのような整備をしてきたのかを図面に整理してもらいたい。例えば、かなり手をかけて竹林を全伐して植生を回復させたいエリアがあった。ところがなかなか出てこないで、圃場で苗を育てて植林エリアにしようという話が、そろそろ出てきているはずである。

・竹林の最前線はどこにきているのか、どれくらいの幅が最前線なのかも整理してほしい。

・樹種の持ち込みについては、きちんと吟味した樹種であれば、弾力的に考えてもよい。近隣の地域で実生を採集する日を設けてもよい。

<協議案件3：東地区の基本計画について>

東地区の基本計画について事務局より説明。

・千早赤阪村に、大橋山という朝日森林文化賞を受賞した山がある。吉野林業がそこに修行に来るような山である。そこでは、路網整備を基本とした大橋方式をとられた。作業道整備としては大成功した方式である。そんな方法も検討してもよいかもしれない。

・貴重な植生が劣化しないような方法を検討していきたい。相観植生図などの調査結果が出てきた段階で、昔の道も図面に落としてほしい。

・パーククラブとしては、まずは中地区の整備に力を入れたいと考えている。東地区と西地区については、現時点では何も考えることができない状況である。

・竹林管理の負担を減らすために、竹林の拡大を抑制する方法も検討する必要がある。

・産業廃棄物の捨て場所になっていないか、なども確認しておく必要がある。

・大学での調査でわかったことは、竹林は年間で3mずつ拡大していく。あっという間に山を駆け上ってしまう。塹壕のような形で、深さ1m、幅3~40cm程度の溝を掘ると越えてこないが、そのような方法も検討してほしい。

<報告案件3：プログラム報告（8～9月）>

永井委員よりパーククラブのプログラム、事務局より大阪府のプログラムについて報告。

・アライグマは特定外来種なので駆除対象だが、イノシシも対策が必要である。農業の鳥獣被害対策として行政がサポートしてくれることもあるので、農業被害という観点で考えてほしい。

<報告案件2：パークレンジャー養成講座について>

パークレンジャー養成講座について、事務局より報告。

<報告案件3：第5回企業の森活動現地体験会の実施について>

第5回企業の森活動現地体験会の実施について、事務局より報告

・企業の森活動については、第2パーククラブのように進めることは難しいことがわかったので、そうではない方向性でどう進めていくのかを提案してほしい。

・自分たちで竹林を管理して園路を作り、プログラムを作るということは難しいが、とはいえ全く企業の参画がなくなるわけではないので、企業参画の仕組みについて検討する必要がある。

<報告案件4：えんづくりプログラムの募集について>

えんづくりプログラム募集について、事務局より報告。

<報告案件5：秋の郷あそびイベントについて>

秋の郷あそびイベントについて、事務局より報告。

<報告案件6：その他>

コミュニティバスについて、真瀬委員より報告。